アウシュヴィッツを訪れて

Ｉ．Ｙ．

アウシュヴィッツで感じたあの空気を忘れることはないだろう。今でこそ緑にあふれ建物も整備されてはいるが、その場所は常に私たちに「考える」ことをやめさせないのだ。

グローバル化した現代に生きる今私たちは、遠く離れた世界で起きた出来事なども多くの文献や資料を通して知ることができる。しかし、この旅行では現地でしか感じたり考えたりできないことが多くあることと、その重要さを痛感させられた。多くの衝撃を受け、感想となるととめどもなく生じるのだが、ここではアウシュヴィッツで感じ、考えたことについて、「伝える」という視点から述べていきたい。

本当に多くの疑問が生じた。まず、「教育」とは何なのだろうかということ。私たちは言葉を学び文化を教わりながら、自分の属する社会の価値観や常識を伝えられ、社会化される。一度根づいた価値観はなかなか変えることが難しいし、常識からはずれることは下手をすればその社会からの逸脱を意味する。差別や人種の問題が人間の歴史と常に共にあるのはなぜだろうと考えると、ネガティブな発想だと思うが、人間は自分の存在・アイデンティティを防衛するために生きているのではないかという考えが浮かぶのだ。つまり、拠り所である社会＝コミュニティーが、宗教（神）がある、それを強める言語が、規則(ルール)がある。それがあることで、またそれに従うことで一人では生きていけない人間はこの世界で格段に生きやすくなるのではないか、ということ。集団に属していることでどんなに過ごしやすいかは、日本人である私たちはかなり感じるところであろう。もっとも、それはすでに当り前となっていることであり、違和感はないけれども。そしてそのための「教育」は、支配や飼いならしという言葉につながる可能性を持つし、戦争を正当化させ、アウシュヴィッツのような事態をも引き起こす力があるのだ。自己防衛は生存競争ともいえる。

ここで教育の果たす重要さを再確認するとともに、はたして本当に人間は自己防衛というある種の動物的本能の為に生きているのかを考えるのだが、アウシュヴィッツで貴重な証拠写真を残した人はそれとは異なる、さらなる可能性を示していた事を思い出す。（否定的に言えば、私のこの現実を伝えたいという気持ちそれ自体、自己防衛のための自己犠牲ともいえるのかもしれないが。）自分の真実、思い（信念や愛などでも）を伝えることは時に命に変わるのだということ。そして何が善で悪であるかということも今私たちの居る社会が決め、今ある常識は今しか通用しないように、これから先、未来のそれらは今生きている私たちが何をどのようにして「伝える」かによって変わってくるものなのだ。アウシュヴィッツが老化を辿りながらも、ほぼ当時のそのままを残していることも、墓地としての役割を担っているだけでなく、見る者に伝える力を持っているからでもあるだろう。

今、私たちは自分の属する社会という常識の中に居ながらも、戦時下のように極端な制限を受けることなく学びたい・知りたいという思いを叶え、「伝える」ことを選択し、受信することができる。そしてそれらを、また自分の意見を様々な方法で「伝える」側になることができる。重要なのは、見れる・知れる・聞ける・言える場所に置かれてさあどう行動するか、ということだろう。私はもっと多くのことを知り、考える必要性を感じ、そしてもっと生き（活き）ねばならない。そんなことを考えた。

研修旅行に参加して

S. T.

今回の研修を通じて、「戦争とは何か」ということを考えるようになった。まず、戦争が起こる背景について考えなければならない。多くは、自国の利益が目的である。そう考えると、食料を栽培しなくても自然に溢れていた縄文時代が最も平和だったのかもしれない。現代の家庭にはさまざまな国からの食材が溢れ、電化製品が並んでいる。私たちが学校に行き、おいしい食事を取り、清潔な布団で眠ることができるということに、感謝しなければならない。日常生活から、私たちが‘戦争’というキーワードを見つけにくいように思えるかもしれないが、目を向ければ意外なところにこのキーワードを見つけることができる。それは、ティッシュ、テレビに映るマスゲーム、パソコン、電子機器、飛行機などからである。世界大戦の反省とは裏腹に、戦争や紛争はさらに増え続けている。そうした現実を私たちは、自覚しているだろうか。日本という島国では、侵略についての感覚がとても実感しにくい。しかし、大陸では侵略への恐怖は大きく、常に向き合っていかなければならない問題である。

今回訪れた国、ポーランドとオーストリアはそれぞれ、侵略という過去をもっている。ポーランドは３度の分割、そしてナチス時代に支配された歴史をもち、オーストリアはキリスト教の東方の砦であった。こうした二つの国を訪れることで、島国にはない緊張感を感じた。不思議な空気に触れているような気さえした。まだ、第二次世界大戦の傷跡は、街のいたるところに残っている。日本には木の文化であることから、建物はなくなり時代によって大きく変化するが、ヨーロッパは当時の建築物が数多く残っており、生活感がある。そうした中では、ごく当たり前に過去の歴史を見ることができるのかもしれない。日本と違う場所で、戦争について考えると日本についての違った側面が見えてくるような気がする。

第二次世界大戦中、日本と同盟を結んだドイツでは、ユダヤ人、ポーランド政治犯、ロマなど多くの人々がアウシュヴィッツで犠牲となった。なぜ、あそこまで完璧なシステム構造が完成したのか、なかなか理解できない。圧倒的な人数であったはずのユダヤ人たちはなぜ反撃できなかったのだろうか。中谷さんも述べていたように、「子どもを守るのに精一杯だった」「ユダヤ人には、共通の言語がなかった」という理由が挙げられる。実際に、アウシュヴィッツに立ってみて、銃剣を構えた兵士に監視される中で、むやみな行動などできないと感じた。とてつもない緊張感と恐怖が襲った。最悪の状況の中で、人々が理性を保つことができたのは、肉親・友人・愛する人を守りたいという思いだったに違いない。そうしたことは、恐怖の中にあって最大に希望であっただろう。しかし、生存者たちは、生存競争の中で生きのびたことで自己への猜疑心に悩まされている。生き残ってしまった者の心を私たちは理解できるだろうか。そこで起こった出来事は想像することが難しい。そして、理解しがたいものである。人としての扱いはなく、個人が薄れていく恐怖。同じ髪型、同じ服、胸のワッペンが種を分ける。一日を生きるのに精一杯な日々。何か間違いを起こしてしまったら、すぐに死が待っている。それは、常に死と隣り合わせの生活である。収容所内を歩いていると、ひしひしと伝わってくる緊張感と冷たい空気。監視する側もされる側もそれぞれが恐怖をもっていただろう。

収容所の裏側には、所長ルドルフ・ヘスの家がある。なぜ、ここで生活できたのか疑問が残る。人の精神は、状況に応じて変化できる何か強靭なものがあるのだろうか。

ここで考えたいのは、戦争方法の変化が人々に及ぼした価値観・道徳心である。火縄銃が日本に伝わって約五百年。銃は一瞬にして人の命を奪う。銃の登場や兵器は人々の価値観を変化させる要因の一つでもあるだろう。アウシュヴィッツでは、死の効率性と心身的苦痛の排除が徹底して行なわれた。

ごく普通の人がアウシュヴィッツでは変わってしまう。その任務に就いたら、任務を完全に遂行する。戦争とは普通の人がそうした行動を取らざる負えない状況になるものなのだろうか。感情は完全に排除されてしまうのだろうか。

戦争について、映画監督の宮崎駿はこんなことを語っている。「空襲の中を車で逃げるとき、子どもを抱えた母親が「お願い、乗せてください」といったが、父母はその願いを振り切って炎の中を駆け抜けてしまった。子どもを守るために、そうしてしまった。しかし、戦争とは何でもないような人が、そうした行動を取ることができるのです。そして、戦争は、自己犠牲・祖国愛という勇ましい部分と共に、世の中のもっている一番醜いものが拡大される舞台なのです。」（ユリイカ８月臨時増刊号　総特集　宮崎駿の世界、1997）ユダヤ人の場合も、長い間ヨーロッパの人々が溜まっていた気持ちを利用したのがナチスだった。妬みという醜いものが拡大された究極の場所がアウシュヴィッツだったのかもしれない。人々の心を上手く利用したナチスは、本当に巧みだったように思う。アウシュヴィッツの問題は、ドイツだけでなく、ヨーロッパ全土の国々が考えていくべき課題なのだろう。また、日本は戦時中アジアの国々にどのような行為を行なってきたのか、まず事実を明らかにしていくべきではないだろうか。日本が世界で生きていく上で重要な課題だと思う。

最後に、文化について。人々のアイデンティティは血統や宗教、文化、言語、人種などさまざまなもので形成される。ユダヤ人はユダヤ教を信仰していることが前提となっており、よってユダヤ人も多様である。ユダヤ教はキリスト教の元であり、イスラム教はキリスト教の兄弟であるといわれている。この三者間では多くの争いが繰り広げられてきた。宗教の問題はとても慎重に扱うべき問題であり、人類とは切り離せない文化である。ユダヤ教という共通の文化をもったユダヤ人は、アウシュヴィッツの歴史から、自国をもち団結して戦わなければならない。その結果、シオニズム運動を復活させ、イスラエル共和国を建国した。しかし、そこには、ユダヤ人たちが離散した後に、住み、生活した人々がいたのである。彼らを排除し、難民にしてしまったのである。ユダヤ人はそのことについてどのように考えているのだろうか。イスラエルは中東紛争の中心である。そこはイスラム教とキリスト教、ユダヤ教の巡礼地でもある。アウシュヴィッツからの教訓が新たな悲劇を生んでいる。

戦争はさらなる戦いを生むだけなのか。イスラエルの国旗を掲げ、アウシュヴィッツを訪れる若者は、いまの現状をどのように感じているのだろうか。アウシュヴィッツから、多くのことを考えさせられる。ヨーロッパを含めて世界で考えていく問題であり、今も続く紛争について私たちは何ができるのか考える必要があるだろう。ただし、こうした絶望の社会の中で、文化だけは色濃く、抑圧されても死ぬことはない。抑圧されてきたポーランドでは、抑圧とは逆に色とりどりの民芸品が人々の心を豊かにする。ヨーロッパの砦であったオーストリアでは、芸術が花開き音楽が心を豊かにしてくれる。戦争という歴史の中で、文化は紡がれ続けていく。支配は、文化までは支配できない。文化を支配することは、人々のアイデンティティにおいて最も恐ろしいことになる。しかし、日本は文化というアイデンティティに最も強く支配をかけた国である。氏姓改名、言語統一、天皇制、教育など文化的に最もタブーであるだろう支配を行なった過去をもっている。私たちは、そうした歴史を忘れてはならないし、自覚していくべきだろう。

今回の研修では、戦争・文化をもっと考えていく必要があると思った。最終的に日本について考えてしまったが、日本も世界の歯車の一つであり、慎重に行動していく必要があるように思う。また、もっとさまざまな世界について触れていきたいと思う。

９日間の中欧巡検を終えて

A. Y.

９ 日間の巡検は、自分にとっての「何か」を与えてくれたと思う。まだ、その「何か」ははっきりわからない。ただ、アウシュヴィッツから帰ってきた今、「このままでは駄目だ」という気持ちを抱くようになった。ありきたりな事だと思うが、自分をどうにかして変えていかないといけないと強く感じるようになった。

それは、単に９日間を異国の地で過ごしたから、という訳ではない。アウシュヴィッツでの中谷さんのお話は、実際に当時起きたことだけでなく、新たな視点を学んだ。中谷さんは、日本人としてアウシュヴィッツを考えること、この事件を特殊化するのではなく、似たような事が日常にもあることなど・・・アウシュヴィッツでのユダヤ人虐殺という１つの事件の見方、読み直し方を教えてくださった。また、ユダヤ人街、ユダヤ人墓地に行くことによって、当時彼らが置かれていた状況と、今の姿をあわせて見ることができた。学校で教わったり本で読んだりするのとは、衝撃の受け方が違った。１人旅では気がつかないようなこともたくさんあった。これだけでも，この旅行は自分の意識を変えるよい機会になったと思う。

しかし、これだけではないと思う。帰ってきてからもよく思い出されるのが、ウィーンとクラクフの若者の姿だ。同じ世代の人から受けたものが何なのか、明確にはわかっていないが、自分の心の中に消化できないものとして今も残っていると感じるのだ。クラクフでの自由時間にふらっと教会に立ち寄った。そこには観光客は立ち入れなかった。そのため、観光客として振舞うことに躊躇して、椅子に座って周囲を眺めていた。そこで、自分と同じ位の年齢の人たちが通勤とか通学の途中に教会へ立ち寄り、真剣に祈る姿を見た。また、ウィーンでは、デモ行進をしている人やドラッグでヘロヘロになっている人を見た。この人たちも私と同じ位の年齢のようだった。

こうした人々を目にして多くの事を考えた。たとえば、教会が私たち観光客用に機能することの問題点はあるのかということ。またデモ行進では、言葉が分からないから何に対して行っているのかも分からなかったが、周囲の人が立ち止まり、真剣にデモを見つめているのはなぜか、清水さんが薬物中毒になりつつあるような人に「排除」という言葉を使っていたのはどんな意図があるのか、などこれから考えたい様々な疑問が湧き上がってきた。しかし、この３つのパターンの若者、そして私との共通点はあると感じた。一見したところ、世代だけに思われがちではあるが、それだけではないと思うのだ。というのは、どこの若者も自分の存在に不安を持っているのではないだろうか。不安定でしっかりとした自分がなく、先行きが分からない…。こんな不安に駆られているため、自分を認めてくれるものだったり、自分の存在意義となりうるようなものとして、宗教だったり、デモ行動だったり、ドラッグだったりするのではないかと思うのだ。それは確かではない。単に自分の持つ気持ちが、見たものに反映されて、あたかも、見たものがそのように感じて、行動を起こしていると思ったのかもしれない。もしかしたら、この不安は私だけで彼らは感じていないのかもしれない。

９日間の旅行には新たな出会いがあり、いろいろな場所に連れて行っていただいた。終わって、そんなに時間が経っていない、今であっても自分に大きな何かを与えてくれたと思っている。これから、何度も思い返していくことで、その「何か」が、何なのか、見えてきて欲しい。とりあえず、私は帰ってきて、焦燥感に駆られている。やるべきことは少し見えてきている。その意識は、日が経てば経つほど薄れてくる。どうにか持続させて、前向きに取り組んで行きたい。

アウシュヴィッツ 感想

K. M.

アウシュヴィッツのような強制収容所を実際に訪れれば、その当時の戦争の悲惨さや状況を理解することができると考えていた。今回のアウシュヴィッツ・ビルケナウを訪れる研修に参加した目的は、そんな風に現地からひしひしと戦争の実感が伝わってくるものを感じ取りたかったところにある。では、自分が現地に赴いて、何か実感を得ることができただろうか。残念なことに、これといってはっきりとした実感を得られていないような気がしている。

現地では、博物館と強制収容所を見学した。昔、たくさんの人が強制収容され、働かされ、殺された場所である。一度に何人もの人が殺されたガス室を見る。証拠隠滅のために爆破されたガス室もある。悲惨なことが行われた場所が、当時と同じ広い土地に残されている。当時はこの場所に多くの人がいた。ナチスの隊員がいて、死と隣り合わせの収容者がいて、それだけに重々しい雰囲気だったのだろう。しかし、今は違う。多くの見学者がいる。けれど、とても静かだった。「負の遺産」といわれる歴史とは程遠い場所のように感じてしまう。それは、自分が直接はアウシュヴィッツと関係していないからかもしれない。当時、ここで生活をしたことがある人ならば、鮮明に当時の暮らしを思い出すのか。あるいはここで親族を亡くした人ならば、もっと別の気持ちになるのかもしれない。

アウシュヴィッツを訪れて、最も残念に思えたのが、やはり戦争時代の実感がわかなかったことだった。以前、「想像力」が大事だという話をされたことがある。自分とは関わりのないことでも、その立場になって考えてみる。まったく自分とは別の状況にいる人を想像してみる。そんな話を思い出して、アウシュヴィッツを見学しながら自分も想像してみようと思った。想像することで、現地に来たことで感じられることがあるかもしれない。しかし、うまく想像できなかった。まず、どの立場にたって想像すればいいのか。ナチスの隊員、収容者、もしくは遺族か。わからない。収容者を一人取り上げたとしても、その人がなぜ収容されているのか、どういう経緯で収容されたのかもわからない。そんな人々の持つ背景を自分は理解しきれていない。たとえ家族と離れ離れにされた気持ち、必死で生き抜こうとする気持ちを想像しようとして、どこまで自分にできるのか。想像しようとしてもできない気がする。そう考えると、自分には想像力や考える力が無いものだなぁとがっかりしてしまう。

想像ができない。つまり、現地に来て実感がわかないことに愕然とする。実感がわかないのは、思いのほか物々しい場所ではなかったからかもしれない。アウシュヴィッツに対する自分の中での予想と現地の雰囲気が違うことに驚いたのか。収容所を目で見るよりも、本で体験録を読んでいた方が当時の悲惨さは伝わってくるように感じた。それでは、自分にとってアウシュヴィッツを訪れたことに意味はなかったのか。アウシュヴィッツを訪れて得たものがあるのか, いまだはっきりとわからない。

しかし、漠然と思うところはある。過去に戦争があったという事実。そして、アウシュヴィッツのような強制収容所があったという事実に立ち会えたように思っている。自分の目で見て、過去の戦争を考える場がなければ、間接的にしかアウシュヴィッツを知らない人は、極端ではあるがその歴史を忘れてしまうかもしれない。たとえ、ダヴィデの星を掲げてアウシュヴィッツを訪れる人、親族がアウシュヴィッツでこくな日々を送った人たちであっても、時がたつとともに事実は薄れてしまう可能性だってある。現地に訪れて、過去の歴史と向き合う時間を持つ。そこに携わる人や、現地の今の姿を見る。「歴史を伝える」重要性は初めに説明されたことだけれど、アウシュヴィッツや博物館が残され続けるその意味を自分の中である程度は理解できたように思える。

今回、加賀美先生の巡検へ参加して最も良かったのは、一緒にアウシュヴィッツを訪ねたほかの人

たちの意見を聞くことができたことだと思う。組織と個人について、アイデンティティを問う人。アウシュヴィッツが観光名所化されていくことや、他の来館者に目を向ける人。ロマやリーダーの在り方を考える人。人それぞれ感じることは違って、各々の意見を持っていた。対して、私はアウシュヴィッツについて感想があるかといえば、今はガイドしてくださった中谷さんや他の人の意見に感心している部分が大きい。けれど、これから先、何か一つでも掘り下げて考えることができればいいだろう。何かの機会に、今よりも深く考えることができるかもしれない。今回のアウシュヴィッツ訪問は、戦争を含めた負のものごとに向き合うきっかけになったと思っている。

巡検を終えて

S．M.

まず、アウシュヴィッツ博物館に入って思ったこと、それは意外と「重く」ないということだった。そこは，中谷さんがおっしゃったように，まるで大学のようで、建物の中はきれいで、“あぁ、観光地化されているんだなぁ。”と自分も観光客なのに思ってしまった。しかし、さすがに個人写真の前ではずしっと来るものがあった。先生がおしゃっていた、“個人が見える”というものはすごく大事なことなんだなと実感した。本でみた大きな数字より、たった１枚の写真が自分の中でこれほど大きく心に残ることは、自分の足で見に行って、感じられてよかったなと思わせることの一つである。また、収容所での生活はSSの厳しい管理が１日中ずっとはなかったことに驚いた。収容者同士で、“生存”という希望を奪い合わせ、仲間になれたかもしれない同士をライバルに変えるというシステムは、本当に残虐、かつ巧妙なシステムだなと思った。

このようにアウシュヴィッツをまわりながら感じたこと，それは、私は今まで自国の歴史について学んできたが、正直ほとんど知らないというか覚えていないこと。私は、日中・日韓問題もわかっているようでわかっておらず、広島の原爆ドームにさえ行ったことがない。自分の国の歴史についてきちんとわからないことは恥ずかしいなと痛感した。まずは自分の国についての歴史を知るというところから始めなくてはならないなと思った。

ナチスの大量虐殺が行われたことへの批判は、もちろん今もなされている。しかし実際、自分があの時代に生きていたらどうしていたのだろう…と考えた。その時の社会情勢や常識を別の視点から見ることはすごく難しいことである。SSの人たちが戦後，「しようがないこと。自分たちは自分たちの役割を果たしただけのこと。」と言っているのを言いわけだという人もいるが、私は一概にそうだとは言えないと思う。開き直りはよくないとは思うが…。ユダヤ人が標的（犠牲）になったことは、偏見やイメージだという。偏見は今の世の中にもたくさんあるし、絶対なくならないものである。ユダヤ人やロマというとどこか遠くに感じてしまうが、身近な例でいえば、ホームレスに近いのかなと思った。私たちはホームレスが近くにいたらある程度、警戒はすると思う。ナチスのやり方は非人道的で称賛するに値しないことだが、基本的人権を守る範囲でならホームレスを少なくすることに対して、反対をする人は多くないのではないか。アウシュヴィッツで行われたことは、遠いようで遠くない、まだ何も解決していない（解決するかもわからない）問題なのかなと思った。アウシュヴィッツ博物館は，ただ現在に存在しているだけでなく、そこから未来につながる何かを発信しているんだなと、巡検を振り返りながら改めて思った。その発信されたものを自分なりに受信し、自分なりの考えを見つけ出せたらいいのだが、私はまだそんな段階にいっていない。今回の巡検をきっかけに自国である日本と世界のかかわり、さらには世界の国々のかかわりに目を向け、知識ではなく歴史やそこからくみ取れる国や人の在り方について、生涯かけて学んでいきたいと思う。

アウシュヴィッツ・感想

N. H.

実際にアウシュヴィッツを訪れて、終始、鳥肌が立っていた感覚が忘れられない。今振り返って、自分はそれほどまでに衝撃を受けていたのだと思う。どことなく遠い過去のように思われるけれど、実はそう遠い過去ではなくむしろ今に近い過去であって、そう思うことが余計に自分の中の緊張感をあおっていたような気がする。

今の世の中にだって、ある特定の民族を排除する社会というのは存在していて、このアウシュヴィッツで起こったことというのは、単に「昔に起ったこと」として片づけてしまうことはできないだろう。現在の私たちひとりひとりの中にも、ある対象を排除しかねない危険因子が内在していると思うと、しっかりとこの歴史と向き合って反省し、その反省をこれからに生かしていかなければならないと強く思う。そしてこの巡検の感想を問われたときに、私たちは、各々が感じ考えたことをしっかりと伝えていくべきだろう。

私がアウシュヴィッツで一番感じたことは、「人間の恐ろしさ」である。そんなときに、以前、文化人類学で「差別の構造化と宗教・民族対立」についての講義で聴いたことを思い出した。その概略は以下のようなもので、私がその講義の最終レポートでこの講義の要点についてまとめたものの一部を引用する。

「人々は、防衛的反応として宗教・民族・国家・地域などに依拠することでアイデンティティを確保し、安心感を得ようとする。つまり共同体を欲するわけであるが、ここで現れるのが「～ナショナリズム」であり、このナショナリズムこそが対立・紛争のもととなる「排他性」を保持している。そこで、アイデンティティ構築において、「所属の論理」（三者関係での構築）をてこに「努力の論理」（二者関係での構築）を深めることが大切となる。前者では、類化のマジックによって簡単で性急にアイデンティティを確立できるが、共同体が崩壊するとアイデンティティ不安に陥る脆さが特徴であり、また、自らが所属する方を正当化することで「差別」を生む（ナショナリズムはこちらに属す）。一方、後者は自己肯定物語に対する他者承認によるものなので、排他性を持たず、正統なアイデンティティ構築といえる。人は前者の「特殊性」を持つ私と、後者の「単独性」を持つ私という二つの自分がいることを忘れてはならないのだ。誰もが「単独性」における孤独に耐えられないがために、「特殊性」を持って安心感を得たがる。これが人間だ。さらに大事なことは、不安感や嫉妬心に対処できない結果として、妙な行動に走り、自分ないし相手を傷つけることになるのだというメカニズムがあることを理解し、不安感や嫉妬心は危険なものであるという意識を持つことである。現代社会における紛争や対立の危険因子は、私たち人間の心にあるのだということを認識しなければならない。」

以上のようなことを思い出して、時代背景により、ヒトラーはドイツ人をまとめるために、巧みな話術などでドイツ人を国家ナショナリズムに傾倒させることに成功したが、これは最終的には人々のアイデンティティの問題とも絡んでくるのではないかと思った。また、自らが生き残るためには、たとえおかしいと思ったとしても、大衆が支持する国家に適応せざるをえないという人間の弱さをも感じた。

以上が、今回のアウシュヴィッツ訪問で私がおもに感じ考えたことである。このことをいかにリアルに伝えていけるかが今後の課題だと思う。

アウシュヴィッツ博物館を訪ねて

H. M.

実際に目で見て感じたことはそのときは覚えていても、博物館を出たら、日常の生活が待っていて、すぐに忘れてしまいそうな気がした。それは調子が良くてずるいことのように思えた。そんなことを中谷さんに言ったら、「ずっと考えている必要はない。たとえば就活、恋人選び…社会のいろいろな場面で使えばいい。1年後、5年後、10年後にパッと思いだして考えればいい」とおっしゃっていて、ちょっと意外な答えだった。社会の色々な場面で使うとはどういうことなのだろう。アウシュヴィッツで起きたこと、起きてしまった過程などを思いだして、自分に問いかけ、いろいろなことを一度は疑うきっかけにするということなのかなと思った。

中谷さんが「あなたの心の中にも差別があるかもしれない」とおしゃっていたのが印象的だった。差別や偏見というのは誰の心の中にでもあり得るものだと思う。人は、その人がおかれた環境に適応しながら育っていく。ということは、その環境の中で培われた価値観や常識がその人にとって“当たり前”になるわけで、その人の“当たり前”とは違う価値観や常識と遭遇したとき、違和感を（決して悪い意味でなくても）覚えるのは当然だと思う。この違和感を排除する方向へ向かってしまうと差別につながると思うし、自分が育ってきた社会の“当たり前”との違いを決めつけてしまうのが偏見だと思う。差別や偏見をなくすためには、違いを無視したり見ないふりをしたりするのではなく、違いを理解し、認め合うことが必要で、“当たり前”とは違う価値観や常識に遭遇したときに感じる違和感は決して悪いことではないと思う。その時、自分の“当たり前”は当たり前ではなく、ただ“慣れている”だけだということに気が付くことが大切だと思う。しかし、人はきっと新しい物に触れるときには勇気やパワーが必要で、ちょっと気を許すと、ついつい慣れた価値観や常識だけを当たり前だと思ってしまって、自分にとっての新しい価値観や常識を理解し認めることを怠けてしまう。でもそこを理性でどうにかできる（するべき！）のが人間だと思う。そのきっかけになるのがアウシュヴィッツなのかなと思った。

アウシュヴィッツに行ってどこまで近く自分のことのように感じられるか。しかし、所詮追体験も限界があると思う。では、この博物館は何を伝えようとしているのか。訪れた人に何を感じてほしいのか。中谷さんは、「感じてほしい」としきりにおっしゃっていた。そのときは、あぁそうかという感じであまり気に留めなかったけれど、今はこう思える。地球の反対側にいる人や、そこまでいかなくても自分とあまり関係のない人の痛みを、自分のことのように感じるのは実際かなり難しい。人間は利己的な面もあるから、自分や自分の周りの人しかかわいくない。だから今もなお、世界の各地で争いは絶えないし、そのことにこんなにも無関心でいられる。無関心であるということは、いつかまた争いが起きる可能性を孕んでいると思う。そこで、この絶えない争いを止める、そしてもう二度と起こさないためのカギになるのがこの博物館だと思う。生で見て、感じて、「ひどい」とか「どうしてこんなこと」とかいう単純な気持ちが、実は大切なのではないかと思う。アウシュヴィッツのバラックや有刺鉄線や、収容された人の服や荷物や写真やその人の家族の写真などを見て、60年前の遠い場所での人の痛みが感じられた気がした。何万人殺されたとかいう教科書に載っているようなことでは、やっぱり学校で学ぶ歴史の一事件という枠を超えられないように思う。

この身近に感じられた人の痛みを、あるいは「ひどい」と思った直感を思い出すことが、争いを止めたり、もう二度と起こさないために必要なことだと思う。単純に、感じたことが大切なような気がした。だから、中谷さんは「感じてほしい」とおっしゃっていたのかなと思う。

みんなで話し合った夜に、なぜこんなことがヨーロッパで起きてしまったのかということが話題になった。私は、自由、平等、博愛、権利等が獲得されたヨーロッパだからこそ起きてしまったのだと思う。ユダヤ系ドイツ人哲学者フロムの『自由からの逃走』に、こんな一節がある。

「中世末期以来のヨーロッパおよびアメリカの歴史は、個人の完全な解放史である。…中世的世界を打ちやぶり、もっとも露骨な束縛からひとびとを解放するのに、400 年以上もかかった。…しかし他面「……からの自由」と「……への自由」とのズレもまた拡大した。どのような絆からも自由であるということと、自由や個性を積極的に実現する可能性をもっていないということのズレの結果、ヨーロッパでは、自由から新しい絆への、あるいはすくなくとも完全な無関心への、恐るべき逃避が起こった。」

日本では、まだほとんどの国民が「家や地域、国といった第一次的絆」に縛られていたから、ズレが拡大せずに、戦時中の社会の状況は、ヨーロッパのそれとは性質が異なっていたと思う。国民一人一人が、自由や自ら選ぶ権利を与えられてはいなくて、家や国は決して変わらないものであり、国民は選択の余地なしに、むしろ選択という考えすら浮かばぬ間に受け入れていたのではないか。ここがヨーロッパと日本の大きな違いだと思う。

先生が、SS にも SS というアイデンティティがあったとおしゃっていたけれど、SS という新しい絆を求め、その任務を忠実に遂行することによって、自らの存在意義を確かめていたのではないか。ナチスは決して暴力によって政権を獲得したわけではないことからしても、市民も、自発的に新しい絆を求めたり、あるいは無関心になったりしてしまっていたのではないか。新しい絆を求め、その絆を維持するために、忠実に任務を遂行するということが危険だと思う。こうして絆(＝社会や組織)に埋もれることによって、その絆の中で“当たり前”とされていることを疑えなくなる。

そうならないために、「積極的な自由」を「新しい安定」にしなければならない。しかし、第二次世界大戦が終わって、現代の社会において「ダイナミック」な自由を手に入れている人がいるのか。日本は、第二次世界大戦時に第一次的絆に縛られていたとして、戦争が終わって新しい絆への逃走という段階をすっ飛ばしてきたとしても、今、「ダイナミック」な自由を手に入れている人はいるのか。争いや差別が今もなお存在するところを見ると、これは世界においても言えることだと思う。とすると、新しい絆を求めて自由から逃走していきそうな不安定さは常にあると思う。というか、今現在も自由から逃走しているのかもしれない。では現代の社会は、何に安定を求めるべきなのか。この問題を解決しないと争いや差別のない社会、一人一人が判断し行動できる社会は実現しないのではないかと思った。

アウシュヴィッツ博物館を訪ねてみて、行く前に抱いていたものとは違う感情、考えを感じた。恐いとかそういう感情は一切なく、なぜこんなひどいことが起きてしまったのか、二度と起こさないためには自分はどうしたらいいのか、そんなことをただひたすら考えていたように思う。その日の夜に、みんなで話し合えたのも良かった。しかし、まだ答えが出ないこと、よく分からないこともたくさんあるし、実際に自分が社会に出たときにどう振舞えるかが重要だと思う。アウシュヴィッツ博物館を訪ねて、自分が感じたことを大切にして、これからも考えていきたいと思う。

中欧巡検　［アウシュヴィッツ強制収容所］を訪ねて

M. M.

アウシュヴィッツに関して、いくら本で読んだり、映像で見ていても、きっとあの独特の雰囲気は味わえないと思う。私自身、バスでの移動中、自分が本当にあの大量殺りくが行われた場所に行くということがどういうことか分かっていなかった。その場所で、しかも中谷さんという最高の案内人の方と一緒にアウシュヴィッツを歩けたというのは、一緒の思い出だと思う。

アウシュヴィッツに着いて、初めに思ったことは「広い。」その一言に尽きた。そして何とも殺風景な場所だろう、と。映像で見るよりも臨場感があった。リアルに死のにおいというか、薄暗さを感じた。そして、見学者の人数が思っていたより多く、そのことにまず驚いた。中谷さんが「見学している人の表情をみてください」という前に、実は私は見学者の中に、イスラエルや中東系から来たと思われる女性が博物館の建物前で涙ぐんで、うつむいている姿をみていた。見る人の立場によって、ここを訪れる意味も、重みも違うのではないかと思った。

説明を聞いているうちに、「私たち日本人が見たり、聞いたりしても涙が出てくるほどなのに、もし、自分の先祖、同じ日本人があのような状況に置かれ、虐げられていたらとした、どのように思うだろうか」と考えたとき、イスラエルの人々や、ユダヤ民の人々がここを訪れることは並大抵の努力ではないだろうと思った。「世界の人々がここを訪れる姿を見るだけでも、ユダヤの人にとっては救いになる」という中谷さんの言葉がすごく心に響き、それだけこの場所で起こったことの悲しみは、癒えることのないだろうということを想像できた。

アウシュヴィッツという場所が、ヨーロッパの人々にとって、また、イスラエルの人々にとって、どのような場所だろうか？という問いかけに対し、答えは一つではない。お墓であり、戦争犯罪（大量虐殺）の現場であり、後世の人々に大きな過ちを思い出させてくれる場所であり、民族紛争を考える場所であり、アイデンティティを考える場所であり、、、。勉強会でも先生から軽く人種や民族について説明はあったのだが、私は現場に行って、ますます民族や人種という概念がわからなくなった。人種や民族が違うということだけで、どうして同じ人間を、あのように豚同然に扱えるのか。もちろん、それまで歴史的に作られてきたイメージだけでなく、ナチスによってうまく理由付けされ、扇動され、人為的に作られたイメージが大きく作用したのだろう。そのナチスの徹底ぶりと力の及ぼした範囲をみると、おどろかずにはいられないのだが、この大量虐殺がヨーロッパ全体で起こったということにも目を向けるべきだろう。日本でアウシュヴィッツというとナチスだけが悪い、というイメージが先行しがちだが、その背景に協力したヨーロッパ各国（スタンスの違いはあるとはいえ）にも責任はあるのだろう。そのことを改めて実感した。

アウシュヴィッツの感想

M. Y.

私がアウシュヴィッツについてずっと疑問に思っていたことは、なぜユダヤ人が迫害されたのか、そして，なぜユダヤ人はそれに従うことしかできなかったのか、の二点だった。後者の疑問については、中谷さんが答えてくれた。それは、「まさかナチスがあんな非人道的なことをやってのけるなんて、思いもしなかった」から。しかも、収容所に入れられた人々は国も言語もさまざまで、博物館の展示にもあったように、色分けされ、「ユダヤ人」であっても交流ができなかったから。ナチスは、本来社会を構成して生きるはずの人間から言語を奪い、階級を与えることで、収容所内で人々の拠りどころとなる「社会」を構成することを許さなかった。本に書いてあった「自分の家族の身を案じるのが精一杯だった」という言葉の理由が、アウシュヴィッツへ行ってリアルな感情としてやっと理解できた。

では、なぜユダヤ人は迫害されたのか？　ユダヤ人はお金持ちだから、ドイツの脅威となりえるから…。でも、実際に犠牲になったユダヤ人の多くは特に「お金持ち」ではなかったと記憶している。晩のミーティングで見つけたひとつの答えが、「ドイツ人としてまとまるため」というものである。もし本当にそうなのだとしたら、当時の人々はなぜユダヤ人を差別したのか？を考えなくてはいけない気がする。そこで私が思いついたのは、当時ヒトラーは国民の支持を集めていたけれど、それは当時の国民が心の奥底で「ドイツ人」としてのアイデンティティを求めていて、ヒトラーが掲げたユダヤ人迫害はそのアイデンティティの確立にとって最適だったのでは、ということだった。なぜなら、人がまとまるためには排除の思想が働くからである。つまり、「ドイツ人」としてまとまるためには、必ず「それ以外」が求められるからである。

実際にアウシュヴィッツへ行って思ったのは、やはり文章より写真だし、写真よりビデオで、何より実物を見るべきだ、ということである。アウシュヴィッツには独特の空気があった。観光気分が抜けきっていなかった私には、シャッターを押しづらい瞬間が何度もあった。特に、国旗を背負って歩くイスラエル人の学生を見たとき、私の心は複雑になった。死の壁には色とりどりの花が手向けてあり、火の点いた蝋燭が置いてあるところもあった。アウシュヴィッツに収容された人々が最後まで大切にしていた写真を飾っている部屋に入ったとき、私はとても切なくなった。それはきっと犠牲になった人々が「ユダヤ人」ではなく「人間」として、より身近に感じられたからである。それまで「数字」でしか知らなかったものに「人」が見えたのである。ピントの合った写真はナチスがプロパガンダ用に撮影したもので、「事実」を撮った写真はピントが合っていなかった。命がけで写真を撮った人、運よく生き延びた人、絵にすべてを託した人がいなければ語られなかった「事実」がアウシュヴィッツにはあった。30 年前の出来事を記憶を頼りに書いたという人の絵は、建物の配置はまったく同じで、唯一木の高さだけが年月を物語っていた。歴史は勝者の歴史であって、決して平等ではない。そのことをアウシュヴィッツで改めて思い知らされた。

もう一つ、アウシュヴィッツの衝撃と同じくらいに私の印象に強烈に残っているのは、ウィーンのユダヤ人墓地である。オーストリア人のお墓はきれいに整備され、墓石の形状も様々で、花も添えられていた。今でも気にかけている人がいる証拠なのだろう。しかし、ユダヤ人墓地に近づくにつれて様相は一変する。道には雑草が生え、同じ形の墓石が並び、しかもそれらは斜めに立てられているのである。もちろん、献花はない。ユダヤ人の富裕層のお墓はとても豪華で、まるで神殿の入り口のような立派な墓石もあった。しかし、そこにも花は供えてなかった。お墓を壊したり、ましてや銃弾を浴びせたりするなんて、私には信じられなかった。掘り返されているお墓もあり、それが私にはショ

ックだった。

現在、アウシュヴィッツは「多くのユダヤ人が殺された場所」として知られている。私もそうだった。授業を受けるまで、アウシュヴィッツにロマも収容されていたなんて知らなかった。第一収容所の訪問客で満員のガス室と、誰も立ち止まらないロマの展示室は対照的だった。私が大切にされていた写真を見て、アウシュヴィッツでのユダヤ人の悲劇を「人の歴史」として考えられたように、たくさんの人にロマの歴史を「人の歴史」として考えてほしいと思う。そしてアウシュヴィッツを「数値」や「統計」ではなくて「人が居た場所」として語り継ぎたいと思う。

アウシュヴィッツを訪れて感じたこと

O. Y.

＜アウシュヴィッツを訪れて＞

一番衝撃だったのは、衝撃を受けなかったことだった。アウシュヴィッツで大量の人が亡くなった事実があるのに、周囲には森林があったり、ポプラが植わっていたり、小鳥はさえずっていたりと普通の田舎を髣髴とさせていて、私は本当にアウシュヴィッツに来ているのかさえわからなくなりそうだった。また、博物館内は当時の趣きが残されているものの、内装もきちんとしており、ロマの展示施設は新しくできたということで、展示の仕方がモダンで、悲壮感ただようというより一大テーマパークに足を踏み入れたような感覚に陥った。中谷さんの本にあったように、美化活動をしている人がいて、アウシュヴィッツを常に管理している人がいるのは知っている。その人たちを否定したいわけではない。綺麗に保存して後世に伝えていくことはとても大事なことだと考える。ただ想像より、あまりに綺麗過ぎて、実感が湧きにくいなと感じた。

ただその実感もどこまでを追及するのかというはとても難しい問題なのだと考える。中谷さんがおっしゃっていたように、冷静に見る目も必要だと考えるので、あまりごちゃごちゃしているよりは今のままでいいのかもしれない。ただ、戦争を体験したりした人が何十年後かにいなくなってしまってから、どう維持していくかが課題になるのではないかと考える。日本人であったり、また後世に生まれて戦争を知らない人たちは、当事者の方々の苦しみを想像でしかわからない。今後はこういった人達が増えていく。そういった人達が同じ過ちを繰り返さないように、どう生きていけばいいのか、ということの指針になれるような博物館であるべきだと考えた。

＜心の傷＞

約 60 年たっているのに、いまだに心の傷は癒えないのだなと感じた。ロマの展示室の個人の写真が貼ってある場所には、最近置かれた花がいくつも見受けられた。その花は当時の苦しみや何かをまだ背負っているのだ、ということを私達に伝えているような気がしてならなかった。また、心の傷は被害者のものだけでなく、加害者側にもあるのだなと考えた。そしてその傷があるからこそ、次の思考にたどり着けないのではないのかと考えた。本当は起こった事に対して、今後どう向き合って、生きていくのかということを考えるところまで踏み込んでいって欲しい。しかし、ロマの展示室が観覧コースにはいっていないように、まだまだその境地に達するには時間がかかりそうな印象を受けた（中谷さんもおっしゃっていたように私達と中国、韓国間にある問題もそうなので、他人事ではすまされないような気がする）。

確かに焦って解決するような問題ではないだろう。時間が解決するということもありえると思う。しかし、いつかはこの心の傷と今後の方針に対峙して考える機会を設けなければ、もしかしたらまた同じようなことが起こりかねないと考える（現に、世界では戦争や内紛が起こっている）。

＜人間の汚いところ＞

今回、アウシュヴィッツなどまわってみて、人間は悲しいことに、ないものねだりをする生き物なのだなと痛感した。長く生きられないから、少しでも長く生きるために仲間を犠牲にする。ユダヤ人がお金持ちになって自分たちが苦しくなっている。だから迫害の標的にして金品を奪い返そう、などといった人間の本質をうまく使ったから、アウシュヴィッツがうまくまわったのではないかと考えた。

これは当時だけでなく、現代にも言えることなのではないだろうか。自分になくて他人にあるもの。たとえばお金など。欲することで人間は生きていくことができるのだとも考えられるが、それが過度

に表面上に出てきてしまう場合、お金に関して言えば、強盗などに発展していってしまうのではないだろうか。これは我慢することができなくなったのかということにも繋がっていってしまう気がする。

＜最後に＞

帰ってきた今でも、日常の忙しさに負けているからか、アウシュヴィッツでのことをなかなか言葉にしづらい。今回のレポートもなかなか着手できず、まとまらず、苦戦した。中谷さんが何年後かに思い出して考えてもいいとおっしゃっていたので、私なりに焦らずゆっくり考えていきたい。

今回アウシュヴィツに行けて本当によかったなと思う。ただの旅行というだけでなく、勉強して、予備知識を持って参加できて、（もっとあったらよかったのですが）いろんなことを感じ取れた、考えさせられた旅行だったなと思う。

企画していただきありがとうございました。

アウシュヴィッツの感想

K. A.

アウシュヴィッツで中谷さんにお話を伺い、一番印象的だったことは、ドイツ軍の徹底ぶりだった。ありもしない土地の権利やアウシュヴィッツ行きの偽の切符を買わせたり、自分のかばんに名前を書かせたり、ガス室に送る人に後で自分の洋服をすぐに着れるように自分の服の場所を覚えさせたり、すべてが計算済みのことだった。彼らは収容された人々に絶望の中に少しの希望を与え、ギリギリの状態で生きさせるという、なんとも残酷な手口を使ったのである。中谷さんが案内をしてくださっている時に、「なぜ収容所にこんなにミスマッチなポプラの木を植えさせたと思う？」と私たちに質問されたが、このポプラの木もまた収容された人に希望を与えるために植えられたのだと思う。こんな残酷な場所でも育っていけるポプラの木を見て、多くの人は生きたいと思ったのだろう。

中谷さんが、この収容所の横に家族と一緒に監視員が住んでいたとおっしゃっていたのには、とても驚かされた。こんなに残酷なことが起こっている場所で、家族と過ごすことができたなんて、正常ではないと思う。中谷さんがお話されていたように、収容されている人たちを虫けらと思っていたからこそそのようなことができたのだろう。

さらに驚くことは、このような監視員が戦後に捕まっても、彼らは全てナチスのせいで、自分はナチスに操られていたと言って、罪悪感を全く持っていないことである。被害者が、自分たちが生き残れたのも他人を見殺しにしたせいだと、罪悪感を持っているのになぜ加害者が堂々としていられるのかが、全く理解ができなかった。

最近では多くの人がアウシュヴィッツで起きた悲劇について学ぼうとアウシュヴィッツに訪れている。年々アウシュヴィッツに訪れる人は増えており、同じアジアでも中国や韓国からの訪れる人が増えてきているけれど、日本人はあまり来ないということを聞いて、恥ずかしい気持ちになった。確かにポーランドは日本から遠く離れた国ではあるけれど、当時ドイツと同盟を組んでいた日本にとってアウシュヴィッツで起こったことは、無関係ではない。島国で、外国人と出会ったり話したりする機会が少ない日本にとって、他国の出来事、特にヨーロッパの出来事に対してどうしても問題意識を持ちにくいというのが、日本の問題点だと思う。今回の巡検では、行って、自分の目で見て、肌で感じることがたくさんあった。アウシュヴィッツでの生存者が亡くならないうちに、アウシュヴィッツが過去のことにならないうちに、もっと多くの人に私たちが感じたようなことを体験してほしいと思う。

アウシュヴィッツの感想

A. M.

アウシュビッツ・ミュージアムは、人類にとって平和記念のメッセージモミュメントである。ここは真実を閉じ込めたタイムカプセルであると同時に、未来へのスタートラインでもある。未来を担う若者にとって、今後の生き方の原点になるに違いないと信じている。

洋の東西あるいは南北を問わず、平和を望む普遍的な気持ちはごく普通の日常生活の延長線上にあり、平和の問題を共通項にして世界の人々と未来について話し合うのは、日本の若者にとって貴重な経験であるはずである。このような歴史を二度と繰り返してはいけないという、犠牲者たちの願いで残されたアウシュヴィッツは、この地の体験を自らへの貴重な教訓ととらえる次世代の一人ひとりによって守られている。

アウシュヴィッツ博物安案内を読んで心に残った文章である。この文章を読んでアウシュヴィッツへ行く決意が固まった。

その平和記念の世界的モニュメントであるアウシュヴィッツに対して、日本人は認識が低すぎることがわかった。特に驚いたのが、トップとして国を治める立場にいる首相や、過去の歴史に欠かせない存在かつ現在も国の象徴として国際交流を行っているはずの天皇が、まだアウシュヴィッツを訪れていないということである。たてまえでも厭々でも、国民を代表する立場の人は、足を運んで考えなければいけない問題ではないだろうか。国民の認識の低さには、こうしたトップの意識の低さが影響していると思う。

アウシュヴィッツに行ったことでさまざまな心理作用があの虐殺の場にうずまいていたことがわかった。収容された人々の生存本能を利用し、同じユダヤ人を騙させたり、汚い仕事をやらせたり。生き残った人は、すでにただの被害者ではない状況をつくりだされていた。何もない場所で役割を与え、従事せざるをえない状況は、ただ人々を収容しているだけでなく罪悪感で縛り付ける。ナチスの中に、人間心理をよく理解していた専門家がいて誘導していたとしか思えなかった。

他にも、社会的弱者に生きる権限はないとした保守派ファシズムの考え方。かれらにとってそれは当たり前のことなので、SS 隊員の誰の記述をとってみても特別に罪悪感を抱いている人がいない。より美しく虐殺作業を行い、SS 隊員には見た目のいい者を揃え、人々の憧れの的にしたてあげることで、やっていることをマイナスにとらえる感覚を鈍らせたように感じる。元々あった差別感情を利用し、ユダヤ人を敵と定め、「彼らがいるから、彼らさえいなければ」と訴え続けることも見事にマイナスにとらえる感情を消し、むしろ正しいことをしているよう錯覚に陥っていたのではないだろうか。今でこそ人を殺すことは大罪と捉えられるが、敵をより多く殺したひとが一番すばらしい称号を与えられたのはそんなに昔のことではない。私たちも経済や国際勢力、指導者などが当時のような怪奇状況に陥ったならファシズムに賛同し、SS に憧れることが絶対にないとは言い切れないのではないだろうか。そんな状態を再び呼び起こさないためにもアウシュヴィッツに行って、知って、考えることは現代人に欠かせないことだと思う。

アウシュヴィッツの感想

K. R.

アウシュヴィッツを訪れてみてさまざまなことを考えた。けれど、まだまだ分からないことが多く、そしてこの先も正解は見つけられないかもしれない。しかし現地で見て、いろんなことを感じたことが大切であると思った。また、その感じたことを伝えていくことが、たとえ別の国や時期に起きたことであっても、同じ人間として伝えていくことが必要であると思った。なぜなら、まだ多くの国で戦争が起こり人々の中には偏見が存在しているからだ。

個人が持つちょっとした差別的な思いが一気に突き進んでしまうことによって、こんな悲惨な歴史を作り出してしまったからだ。そのことを意識して、個人それぞれが自分の中のそのような思いについて、もう一度考え直してみるということが、非常に大切なことだと感じた。

日本で行われているいじめや、それを見て見ぬ振りをする教師や大人のずるさは、同じものなのではないだろうか。それぞれの会社や団体、そして家庭、それぞれが自らのことしか考えないで自分の都合が人に何をもたらすのか自覚のないまま生きるのは、とても危険なことであると思う。集団の中での自分の存在、そして立場を考えどうしていくべきなのか、この先私たちの生活のなかでも考えていかなければならないことの一つだと思う。

アウシュヴィッツで起きたことすべてを私たちが知ったわけでもなく、同じ思いを理解できたわけでもないが、収容されていた一人一人の写真から、かつてそこに彼らがいた事実、短い時間を生きた記録を目にし、彼らの生きた姿を見ることができた。SS もまた愛する妻や子がいたエリート存在であったという、そのギャップがどこか怖く感じた。そして、「任務」や「使命」という言葉に隠された難しさ、恐ろしさを知った。

ただ、景観がよく目で見る場所よりも、アウシュヴィッツといった証拠写真が少なかったり、破壊されたりした場所を見て、人の気持が伝わってくる歴史のある場所のほうが私達の心、そして記憶にも残るだろう。また、平和とはとても大きく、難しいテーマであると実感した。しかし、同時に人間にはたくさんの可能性があり、そして学べばどんどん変わっていくことができる生き物であると思った。

アウシュヴィッツの感想

H. Y.

今回、この旅行に参加すると決めるまでの私のアウシュヴィッツに関する知識といえば、高校の世界史と2年前期に受けた金子マーティン先生の授業内容だけであった。その後、出発前までアウシュヴィッツ関連の何冊かの本を読むうちに、具体的なアウシュヴィッツの実態を知っていきアウシュヴィッツに対する認識が大きく変わった。それまでのアウシュヴィッツに対する私の認識は、ただ単に「大量のユダヤ人を虐殺したところ」であり、「ナチスは狂った人間の集まり」であった。しかし、本を読むにつれて、単なる狂人の大量虐殺と認識するのはあまりに安易過ぎるのではないかと考えるようになった。そして現地に実際行ってみて、さらに認識が変わった。

今回、中谷さんという日本人ガイドの方に案内をしてもらい、説明を聞いていて一番印象深かったのはナチスのシステム、政策の凄さであった。あれだけ多くの人を殺すのを実行に移せたのは、さまざまな問題に対応し徹底されたシステム、心理的な政策によるものだろう。迫害や虐殺を再定住政策によるものとし、あたかも正当であるような理論を展開して国際社会を納得させ、国民やヨーロッパの人々のユダヤ人などに対する差別感情を掻き立てた。ユダヤ人側にも再定住の旨を伝え、通常であったら抵抗活動が盛んに行われるところを最小限に抑えてスムーズにゲットー、そして強制収容所へと追いやることに成功した。収容を続ける上で囚人名簿の製作や収容者の写真の撮影、収容所内の美化された写真の撮影などを行うことで、自分たちがきちんと再定住政策を進めていることを国民や国際社会へとアピールし政策を正当化していった。政策に対応した細やかなシステムにより、収容所での虐殺は行われていたのだと思った。今なら犯罪として批判されるべきナチスの政策が、こうした万全のシステム作りによって当時の社会に受け入れられたのであろう。

中谷さんに説明のなかで印象に残ったもうひとつのことは、アウシュヴィッツ博物館の意味である。現地を訪れるまでアウシュヴィッツの現在における意味など考えもしなかったのだが、アウシュヴィッツの入場料が無料だと知ってから存在意義を考えるようになった。大量虐殺の被害者・遺族にとってアウシュヴィッツはお墓のようなものであり、ユダヤ人にとってある種の巡礼を行う場所として存在していることを知り、とても衝撃を受けた。アウシュヴィッツで行われていたことにほとんど関係を持たない私たちにとって、アウシュヴィッツは歴史的な負の遺産であるが、必ずしも皆がそう考えているわけではない。アウシュヴィッツ博物館が無料で公開され、しかもきれいに管理されているのは、アウシュヴィッツに関係する人々のためだからだというのだ。ナチスの大量虐殺がつい 60 年ばかり前のことであり、現在にも大きく傷跡を残していることを、改めて私に思い知らせた。

ナチスのやったことは決して狂人の行為ではなく、ごく普通の常識的な人間が行ったこととして私たちは認識しておかねばならない。このようなことはこれからも起こりえるし、自分が被害者にも加害者にもなりえるのだということを思い知らされた。しかも、そのきっかけは私たちの身のまわりにいくらでも存在するのである。外見を見て国を判別する、というような普通にしてしまうようなことも、ナチスの行った行為につながる可能性を十分に含んでいるのだ。人種や民族といった人間によって作られた概念を、もう一度よく考え直したいと思った。

巡検を終えて

加賀美 雅弘

アウシュヴィッツは実に穏やかな日ざしの中にありました。収容者が絶望的な思いで毎日くぐった“Arbeit macht frei”（労働が自由にする）の文字を掲げたメインゲート、ガス室に直行する貨物列車を呑み込んだ死の門、選別が行われたプラットホーム跡は、どこもたくさんの訪問客の雑踏に沈み、ガス室や焼却場の跡すら、緑あふれる広い空間の中に埋没してしまうかのような錯覚に陥りました。今のアウシュヴィッツで当時の地獄を思い起こし、心の中で追体験することが予想以上に難しいことに、訪問客の多くはいぶかしがるかもしれません。

しかし、私たちはたくさんのことを考えました。なぜ、このような施設がつくられたのか？　なぜ、人はこれほど残酷になれるのか？　死に直面した人々はどのような毎日を過ごしていたのか？　生きるということはどのようなことなのか？　人を愛すること、人を憎むこととは？？

現代においてこの現場が単なる歴史上の過去であってはならないことは言うまでもないでしょう。わずか60年ほど前に起こったことを、私たちは現代世界の中で理解する必要があるはずです。これに類した施設が今なお世界各地に存在し、民族浄化の名で迫害や殺戮、追放といった暴力が続けられているからです。

収容所は今、博物館として多くの訪問客を集めています。しかし、アウシュヴィッツと聞くと、ガス室を見に来る場所だと思っている人も少なくないようです。アウシュヴィッツ訪問をとても嫌う傾向が日本の社会にあることも否定できません、そうしたなかで今回の訪問では、アウシュヴィッツが現在に存在する価値について理解を深めることができたように思います。現代世界を考える上で，この博物館がかけがえのない場所であることを実感できたのではないでしょうか。

旅行では、ウィーンとクラクフという中央ヨーロッパの都市にも目を向けました。地理の巡検ですから、できるだけ歩きました。実際、ヨーロッパの街は歩かないと見えないものがたくさんあります。それでも、長い距離を毎日歩いてブーイングが出なかったのは、参加者一人一人がヨーロッパの街並みに鋭い興味の目を向けていたからだと思います。ウィーンもクラクフも、その町並みが頭の中にしっかり刻印されたものと確信しています。

最後に、アウシュヴィッツ博物館の唯一の日本人スタッフである中谷剛さんには、たいへん丁寧な説明をいただきました。この旅が単なる「アウシュヴィッツ見物」に終わらなかったことを深く感謝しています。

2008年5月2日